

患者参加型カンファレンスの実施にて、 患者の主体性の回復に繋がった症例について

キーワード：患者参加型カンファレンス 主体性 単身生活

片石 彩季¹⁾ 島山 真弓¹⁾ 山本 恵利香¹⁾

1) 公益財団法人 いわてリハビリテーションセンター

【はじめに】

今回、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の50代女性を担当した（以下症例）。症例は入院3ヶ月目にてADLは概ね自立したが、スタッフへ依存的であり退院後の生活を主体的に考える事が難しい状態であった。退院後は独居の為、主体的に生活する必要があると考え患者参加型カンファレンス（以下カンファレンス）を実施し症例の真意を傾聴し、自身を振り返る事で主体性が向上し自宅退院出来た為以下に報告する。尚、本発表において症例からの同意を得ている。

【症例紹介】

現病歴：X年Y月腰痛と右下腿の痺れが生じA病院へ入院、リハビリ目的に当センターへ転院。キーパーソン：父。性格：人付き合いが好き。本人ニーズ：病前の様に歩き復職したい。仕事：物流センターで荷物の仕分け。家族背景：現在独居。子供3人は関東在住で病気の事は伏せており父、弟とは疎遠である。住居：アパート2階。急な階段あり。

【入院3ヶ月目の作業療法評価】

身体機能：MMT; 上肢右5左4。痺れ; 両手指に痺れあり。STEF; 右94左94。認知機能：MMSE; 30 発症前から情報処理能力の遅さや複雑な内容の理解は難しかった。ADL: FIM111(運動80 認知31) 入浴動作見守り。歩行; 院内T字杖、短下肢装具着用し自立。IADL: 洗濯、簡単な調理可能。病棟生活：スタッフに依存的で日中ベッドでゲームをしている時間が多い。

【経過】

退院後は家族支援が期待できないためADL・IADL自立が必須であった。現状から主体性が低下した状態で退院すると予測され、目標共有を目的に初回カンファレンスを実施した。その際自身で目標を見出せず、病気により自己肯定感が低下した発言が確認された。

2回目のカンファレンスでは、各職種で役割を担いOTでは復職時の活動と休息のバランスの獲得を目的に1週間の活動予定表を提示した。又成功体験や達成感を感じられる活動として、ピースでの作品作りを提案した。その際に自身で作業活動を振り返り、次回の目標を立てる作業日誌を記載してもらい、スタッフ側から正のフィードバックを行う様意識した。その結果、徐々に自主訓練として活動と休息の調整をする事が可能となった。また、日誌を通して病気でも活動が可能と認識出来、具体的な目標が増え病棟生活でも依存が減少した。

退院前のカンファレンスでは退院後の生活の工夫点を自ら列挙する事や、普段の1日の活動の他に自主訓練等の目標を見出せるようになった。

【結果】

ADL: FIM119(運動85 認知34) 自立。IADL: 独居可能レベルになり、就労サービスを利用するまでに至った。

【考察】

目標共有を目的に初回カンファレンスを行ったが、症例が主体的に考えることが難しい真因に気付く事が出来た。作業活動を通してスタッフから正のフィードバックを受け自己肯定感の向上に繋がったと考える。加えてカンファレンスを重ね症例の真意を傾聴すると共に適宜目標共有やプログラムの設定をする事で自身を振り返られ主体性が向上したと考えられる。

当センターで実施している視覚探索課題における 健常者の平均所要時間の調査

キーワード：視覚探索課題 動機付け 自動車運転

平 彩花

いわてリハビリテーションセンター

【はじめに】

近年、自動車運転再開を希望する患者が増加しており、当センターにおいても例外ではない。当センターでは、運転再開を希望する患者の注意機能及び視覚探索機能向上に向けたアプローチの1つとしてホワイトボードを用いた数字・かな探索課題（以下ホワイトボード課題）を実施している。しかし、この課題の平均所要時間は明確化されておらず、患者から質問を受ける場面が多い。そこで、本研究では健常者におけるホワイトボード課題にかかる平均時間を調査した。また、TMT-Jとの関連性も見られたため以下に報告する。

【目的】

本研究では1) 健常者におけるホワイトボード課題にかかる各年代の平均時間を明らかにする事、2) ホワイトボード課題とTMT-Jの関連性について調べる事を目的とする。これにより自動車運転再開を希望する患者の訓練に対する動機付けに役立てる。

【方法】

対象は当センターに勤務する職員で、本研究の目的と方法について説明し同意を得られた30～50歳代の各年代6名ずつ（平均年齢はそれぞれ30代:32.00 ± 1.79歳、40代:44.83 ± 2.14歳、50代:53.67 ± 3.78歳、全対象:43.5 ± 9.5歳、男性11名、女性7名）とした。TMT-Jセット1のPartA・B（以下TMT-A、TMT-B）とホワイトボード課題を実施し、各所要時間を計測した。なお、ホワイトボード課題は1～30の数字のみを順に探索するもの（以下A課題）、1～30及びあ～ほの数字・かなを交互に探索するもの（以下B課題）の2種類とした。分析はExcel 2013、Statcel3を用いて基本統計量の算出とPearsonの相関係数の検定を実施し、統計学的優位水準は危険率5%未満とした。また、評価用紙は本研究者が厳重に管理を行い、データの入力後シュレッターで破棄し個人が特定されないように配慮した。

【結果】

1) 平均所要時間は、30代:A課題 83.06 ± 11.69秒、B課題 385.68 ± 20.99秒、40代:A課題 88.75 ± 17.49秒、B課題 435.33 ± 64.4秒、50代:A課題 89.05 ± 17.1秒、B課題 435.15 ± 106.02秒、全対象:A課題 86.95 ± 14.97秒、B課題 418.72 ± 72.34秒であった。

2) ホワイトボード課題とTMT-Jの関連性について、B課題とTMT-A、B課題とTMT-Bの間に正の相関を認めた（それぞれ $r = 0.52$ 、 $r = 0.66$ ）。

【考察】

今回、健常者におけるホワイトボード課題にかかる各年代の平均時間が明らかになった。また、全対象者のデータでは、B課題とTMT-A,Bの間に正の相関を認め、B課題を継続して実施する事でTMT-A,Bで検査される持続性・選択性・転換性注意機能及びワーキングメモリの向上に繋がる可能性が示唆された。これらの機能は自動車運転においても必要な能力の一部である。Lockeは明確で難しい目標が最も遂行を高めるとしており、ホワイトボード課題提示時に患者へ平均所要時間と併せてこの事を説明する事で、患者の課題に対する動機付けの一助になるのではないかと考える。本研究の課題として、対象者の職種の偏りやサンプル数の少なさ等が挙げられる。今後は対象を増やし、更に項目を加えて検討する事で運転再開を希望する患者の訓練に対する動機付けにより役立てていきたい。

【参考文献】

Locke,E.A., Shaw,K.N., Saari,L.M., &Latham,G.P.:「Goal setting and task performance.」『Psychological Bulletin』90, 125-152, 1981

岩手県作業療法士会における自動車運転再開支援特設委員会の活動報告

キーワード：自動車運転 連携 共有

大上 望^{1) 4)} 大久保 訓^{2) 4)} 藤原 宏太^{3) 4)} 小笠原 未久^{2) 4)}

- 1) 医療法人謙和会 荻野病院 2) 公益財団法人 いわてリハビリテーションセンター
3) 盛岡医療生活協同組合 川久保病院 4) 岩手県作業療法士会 自動車運転再開支援特設委員会

【はじめに】

近年、障がい者や高齢者の自動車運転については、社会的な問題として関心が年々高まってきている。岩手県作業療法士会（以下、当士会）でも R 元年度より特設委員会の一つとして『自動車運転再開支援特設委員会』（以下、当委員会）を設置し、活動を強化していく運びとなった。当委員会のこれまで取り組んできた活動をまとめ、今後の課題と展望を述べる。

【活動趣旨】

日本作業療法士協会（以下、OT 協会）では 2016 年度より『運転と作業療法特設委員会』を設置し様々な疾患を持つ運転者の評価、指導に対応すべく活動を行っている。当委員会でも県内の障がい者等の自動車運転に関して、一定の評価、対応が行えるよう、下記 2 点を活動趣旨とした。

- ① 県内 OT の自動車運転再開支援に必要な知識及び能力レベルの底上げ
- ② 臨床で評価や判断に困った時の相談

【特設委員会になるまでの活動内容】

< H28 年度 >

- ① 第 1 回情報交換会（9 施設）

< H29 年度 >

- ① OT 協会主催の会議への参加
- ② 第 2 回情報交換会（8 施設）
- ③ 運転再開支援に取り組んでいる主要 3 施設での情報交換会及び次年度活動計画

< H30 年度 >

- ① 県士会総会にて運転再開支援関連の研修実施
- ② 第 3 回情報交換会（7 施設）
- ③ 新潟県の運転再開支援関連施設の見学（OT 協会の士会支援事業）

< R 元年度 >

- ① R 元年度県士会総会にて、当委員会の設置が承認される

【当委員会の活動報告】

- 1 4 団体意見交換会への参加：
岩手県公安委員会、岩手県教習所協会、いわてリハビリテーションセンター、当士会の 4 団体での意見交換会へ参加し、当委員会のこれまでの取り組みを報告。
- 2 当士会員に向けた研修会の実施（2 回実施）：
岩手県の運転再開支援についての講義と運転再開支援に取り組んでいる県内の施設での取り組みの報告等を実施。
- 3 OT 協会主催の会議への参加：
都道府県協力者会議に出席し、岩手県の取り組みについて報告。
- 4 当委員会内での情報交換会・勉強会の実施：運転再開支援に取り組んでいる各施設の現状や情報の共有及び困難事例を用いたケーススタディの実施。
- 5 当士会員を対象とした自動車運転再開支援相談窓口の開設（R3 年 1 月に開設）

【課題と展望】

1) 関係機関との連携について

免許センターや教習所等の関係機関との連携の不十分が見られ、現在適性検査前に実車評価に対応可能な教習所は主に 2 施設に留まっている。今後は関係機関を交えての運転支援関連の研修会を通して、高次脳機能障がいの理解や体制の構築を図っていく。

2) 運転再開支援の方法の周知

現在岩手県では、運転再開支援における地域差が大きい状況にある。今後当委員会では、県内の施設が運転支援に新たに取り組む足掛かりとなるよう、運転再開支援フローチャートを作成し、運転支援の流れを提示し、共有していく。

3) 行政への働きかけ

返納後に受けられる社会資源やサービスの充実、自治体ごとの制度・条例の整備に向けて、行政と協力していく。

第1回岩手県パラ陸上競技記録会における作業療法士の活動報告

キーワード：障害者 スポーツ 作業療法士

畠山 善郁¹⁾ 林崎 克広¹⁾

1) 特定医療法人 盛岡つなぎ温泉病院

【はじめに】

令和2年10月3日に第1回パラ陸上競技記録会が本県において開催された。本大会は岩手県の陸上競技協会や障害者スポーツ協会が主催し、岩手県作業療法士会の協力にて行われた。今回、運営スタッフの一員として作業療法士（以下 OT）の参入機会を頂き、障害者スポーツにおける OT の活動内容や役割などについて考察を含め以下に報告する。

【記録会について】

本大会の参加対象は、令和2年4月1日現在12歳以上で身体・知的・精神に障害のある県内在住者、ジャパンパラリンピック等上位大会への出場を目指している者、日頃から陸上練習に取り組む選手や一般競技大会に出場の選手等となっており、今回は男女合わせて70名が参加。スタッフは陸上競技会の審判員18名と運営委員12名で構成され、その内 OT2名が誘導・介助係として参加した。競技種目は、100m, 200m, 400 m, 800 m, 1500 m, 走幅跳, 砲丸投げ, 円盤投げ, ジャベリックスローが行われた。

【OT が関わった活動について】

今回行った活動内容としては、競技用車椅子のタイヤの空気圧やダンパーなどの調整、ウォーミングアップ時に実際に走行する選手の座位姿勢やハンドリム操作における左右差など動作確認のサポート、本部テントに待機し受付や招集などの運営支援であった。コンディショニング等のサポートも行える態勢では居たが、希望する選手がいなかった為、当日はトレーナーの役割だけに限らず、運営支援など、その時の状況に合わせて臨機応変な対応が求められた。

【考察】

今回開催された第1回パラ陸上競技記録会において、携わった大きな活動として、競技用車椅子の調整を行った事が挙げられる。障害者スポーツの現場では、競技用だけでなく福祉機器が多々使用されるため、身体面と共に環境面からのサポートも重要となり、トレーナーの役割として福祉機器の知識も求められる。医学的側面と共に身体面と環境面からの介入が期待出来る OT が大会運営に協力する事で、選手のサポート幅が広がると考える。

受川¹⁾は「障害者がスポーツに臨む目的も様々であり、スポーツを通して障害者が自立や社会参加を実現させることにも貢献している。そのため、障害者の QOL を高めるうえでも、OT の専門性を活かせる重要な領域となっている」と述べている。参加選手にとってはスポーツが生活の一部であり、競技を行いやすい体制づくりや選手の競技成績へ反映させる関わりを行う事で、QOL の向上にも繋がると考える。

今後、障害者スポーツ活動への OT の参加機会を増やし、他職種や選手との関りを設け、専門的な知識や技術を現場で発揮していく事で、トレーナーとしての OT の認知度を高める事に繋がり、より障害者スポーツにおける OT の役割を確立していく事が出来ると思う。

【参考文献】

1) 受川 透：障害者スポーツへの介入実績と人材育成。OT ジャーナル 52 (10) : 1025 - 1030, 2018.

MTDLP 事例検討会から見た岩手県における希望される支援の傾向

キーワード：生活行為向上マネジメント 生活 活動

今宮 正彦¹⁾

1) 岩手県立胆沢病院

【序論】

岩手県作業療法士会では、2018 年から障がい者・高齢者支援委員会を設置し、岩手県の障がい者スポーツを中心に文化・芸術に関わる障がい者、高齢者も支援する活動を行っている。委員会の特性として医療以外の多職種と連携することが多いため、現在は、外部と接触する活動を制限しているが、with コロナ時代をむかえ、今後の委員会の活動方法についても検討を進めている。

次の時代への移行期である今こそ、障がい者・高齢者・多職種とつながり続けるために岩手県において、どのような支援、情報が必要かを把握する目的で、同じ事業局である MTDLP 推進委員から、事例検討会で報告された「合意した生活目標」について情報提供して頂き、実際に社会資源の調査を実施した。

【目的】

MTDLP 事例検討会で報告された「合意した生活目標」について情報提供して頂き、岩手県において希望される支援の傾向を調査し、今後の岩手県作業療法士会ならびに作業療法士が支援・情報提供する場合の参考となる実際の社会資源を調査する。

【方法】

調査方法：全数調査

調査期間：2016 年～2018 年の事例検討会

調査対象：事例検討会で報告された事例のうち社会資源を利用する「合意した生活目標」を報告した事例を調査対象とした。

調査内容：タイトル、合意した生活目標、介護度から岩手県における希望される支援を整理し、実際の社会資源について調査する。

【結果】

MTDLP 事例検討数：32 事例

介護度：未申請～要介護 2

調査対象：10 事例

合意した生活目標：農業、外食、イベント関連

【考察】

MTDLP 事例検討会で報告された「合意した生活目標」について MTDLP 推進委員から情報提供して頂き、岩手県において希望される支援の傾向を調査した。調査期間である、2016 年から 2018 年では、14 回の事例検討会が開催され、32 事例の報告があった。そのうち、今回の調査対象になったのが 10 事例で、合意した生活目標として、農業が 3 事例、外食が 2 事例、イベント関係が 5 事例（外出し買い物が 3 事例、お祭りを見たが 1 事例、アイドルになりたいが 1 事例）であった。介護度は未申請が 7 事例で、要介護 2 が 3 事例であった。外出を伴う生活目標の場合、要介護 2 が目安になり、要介護 2 では、何らかの人的サポートが盛り込まれていた。

障がい者・高齢者支援委員会としては、スポーツや釣り、山菜取りなど岩手県の特徴が合意した生活目標に反映される事を期待したが、MTDLP 事例検討の報告では生活の中の作業が目標になりやすい傾向にあった。しかし、実際の臨床場面では農業と並び、旅行や釣り、山菜とりが希望に出ることが多く、作業療法士自身が知らないため、合意した生活目標から外した、あるいは、出来ないと判断し修正した等も考えられる。

今回、岩手県作業療法士会ならびに作業療法士が支援・情報提供する場合の参考となる実際の社会資源を調査する目的で MTDLP 事例検討会から情報を頂き調査を行ったが、傾向として生活の中の作業、農業や外食が目標になることが多かった。農業や外食は個人で条件が違うため、実際の調査は行えなかったが、一般的に建物や経路がバリアフリーではなければ移動が大変なため、作業療法士が支援できるとすれば、環境や移動手段の調整や整備、道具の工夫である。また、新しい生活様式に合わせた、社会資源の利用方法については、情報提供できるのではないかと考える。